



こんなにわずかな積雪を楽しむ様子を見ていたら、被災地の雪は少しでもこちらに降って欲しいとも思ってしまう。

水曜の朝、正門隣のお墓に群がる本校児童の姿を確認しました。いつにない異様な光景に驚き、近づいてよく見たら、それぞれの手には握りこぶし大の若干汚れた雪玉があり、少しでも大きくしようと雪をかき集めているのでした。その無邪気な必死さがかわいいので、きつと仏様も許してくださるでしょう。

火曜の午前中からやや大粒の雪が降っており、子どもたちは窓の外を見てはワクワクしているようでした。ほぼ同時刻に菊池市は青空だったので（出張に行っていました）、ある児童に「この雪は合志市だけ降ってるよ。しかも西南小の周りだけ」とうそぶくと、にっこりしながら「えええ！こわ！」という反応。ここ熊本では、雪が少しちらつくだけでも楽しい話題になります。

そんな期待感にこたえるように水曜の朝は雪が積もりました。うっすらと。しかし「うっすら」であっても、子どもにとっては雪が積もったことに違いありません。登校の様子はいつもよりテンションが高く、そのせいか冒頭のお墓に群がる様子も同様ですが、他にもなぜか車道を歩いたり、歩道のブロック上を歩くなど、いつにない行動が見られて、ケガをしたり事故にならないかと心配しました。学校周辺の通学路は凍結し、ツルツルではないものの滑りやすい箇所もあったので尚更です。積雪や凍結の危険が、雪が積もったうれしさでかき消されてしまうのです。また、車の送迎がいつもより多く、車が滑る可能性もあるのでヒヤヒヤしました。雪が積もれば、いつもにはない危険もあるということ、できれば雪に触れる遊びの中で体感して、その後の危険予測に生かして欲しいです。以前、阿蘇市で約二〇センチの積雪と吹雪の、

中を、しっかりとした足取りで学校へ向かう登校班を見たことがあります。積雪が日常になれば、大人も子どもも全く感覚が違うのでしょうか。

ともあれ、「うっすら」積もった雪を求めて、上の写真のように朝のグラウンドは普段以上の人だかり。登校前は、白く神聖な世界でした。誰かが一番乗りの爽快さを味わったはず。十分もすればグラウンドは無数の足跡による薄茶色に染まりました。

子どもたちは次々と雪玉を見せにきました。背中にかかぶつけられたような感覚もあったのは気のせいでしょうか。雪玉は、握りしめる体温でみぞれにだったり、土も一緒くたの泥まみれになっていたり、決して真っ白ではないものばかりですが、みんな大事そうに持っていました。始業のチャイムが鳴っても、雪玉をどうしようかと右往左往してなかなか教室に入りません。あきらめてどこかへぶん投げたり、壁にぶつけたりして教室に駆け出す児童もいますが、保管場所を考え、探して雪玉をそこに隠し、後ろ髪を引かれつつ教室に上がった児童は少なくありません。次にそこへ行ったときに雪玉があるかどうかわかりません。融けているかもしれないし、誰かが持ち去っているかもしれない。熊本では、雪にそういう儂さを感じます。グラウンドのそこかしこに見られる隠し玉には、子どもたちの念を感じます。これを書いている今（水曜午前中）、雪がしんと降り続けています。窓の外を見ながら、また雪が積もるかどうかわ、「隠し玉」のことが気がかりで、授業中に気もそぞろな児童が約七割はいるとふんでいます。



「隠し玉」の一つ一つから発せられる子どもの念...